



こども本の森 中之島。大阪市の中心部に流れる堂島川と土佐堀川とにはさまれた、水辺にある中之島公園内にこの新しい文化施設は開館します。中之島一帯は、100年以上前に開館した重要文化財の大阪市中央公会堂や、東洋陶磁美術館などが立ち並び、古くから大阪文化の中心地と位置付けられてきた場所です。ここに、絵本や物語の文化が代々引き継がれていく「物語の聖地」が生まれます。

こども本の森 中之島の建物は、建築家の安藤忠雄さんが設計をしました。

「この国のこれからを支えていく子どもたちに、豊かな感性を育てほしい。手軽で瞬時に情報を入手できるインターネットとは違い、読書は心の栄養になる。」この場所には、安藤忠雄さんのそんな思いも込められています。

<https://kodomohonnomori.osaka/>
Instagram @ncbf2020
Facebook / Twitter @NCBF2020



建物内に入ると、3フロア分の壁がすべて本棚になっています。

まさに“本の森”。生命力たっぷりにのびのびと生い茂る森の木々のように、どこにいても壁一面の本がここへ来る子どもたちに視線を投げかけます。

大きな木の根っこのような大階段や、階段裏の少し奥まったスペース、静まりかえった円筒吹き抜けの空間、窓際のソファ、建物内には様々なスペースがあります。みんなで物語を聞く読み聞かせ、大人数でのギャザリング読書、一人で没頭するなど、その時々によって場所を見つけ出す楽しみがあります。また、建物外（中之島公園内）に本を持ち出してもよいのです。公園内の水辺、木陰のベンチ、芝生の上に寝転んでなど、子どもたちは一体どんな場所を見つけ出して、この日に出会った本の世界へ旅立つのでしょうか。とてもわくわくする光景です。

「こども本の森 中之島」のクリエイティブ・ディレクションはブックディレクター 幅允孝 (BACH) が手がけています。

「子どもたちのまっさらな心に語りかけるものが詰まった愉快的本箱」「絵本や物語の文化が代々引き継がれていく聖地」そんな場所へ成長させていきたいという想いのもと、ジャンルにも時間にもとらわれず、こどもの素直な眼差しと感受性に語りかける、こどもの心持ちに寄り添うような多種多様な本を選び、下記の12のテーマに沿って配架します。

また「あの人の本棚」という特別なスペースもあります。ここでは、「こども本の森 中之島」にゆかりのある方の本を定期的に紹介していきます。お一人目は、「こども本の森 中之島」の名誉館長、山中伸弥氏の本を紹介します。

山中氏はこの施設への思いをこう語っています。「子どものころから、本を読むことを通して多くのことを学んできました。読書体験がなければ、医学を志していなかったかもしれません。幼いころからたくさん本に触れ、読書体験を積むことは、その子の将来、そして行く行くはこの国の未来にとって大きな財産となります。豊かな想像力を持った元気な子どもたちが育っていくことを期待しています。」



こども本の森 中之島では、さまざまなジャンルの本を子どもたちの日常生活や好奇心に寄り添うよう、独自に編まれた12のテーマにわけ並べています。



1. 《自然とあそぼう》

屋外の広場から続くこの本棚は、花や植物、木々、森、川、海、山、空の色、天体などあらゆる自然環境について深く知るためのジャンルです。また、その自然と人の関わりについて知るための本も揃います。

2. 《体を動かす》

サッカーや野球やダンスなど運動は好きだけど、普段はあまり本を読まない子どもにこんなテーマは如何でしょう？ スポーツのヒーロー／ヒロインの自叙伝はもちろん、ルールブック、技術書、そこから派生して、人の体について知る本などを選びます。

3. 《動物が好きな人へ》

犬や猫など身近なペットから、ライオンやクジラ、鳥、魚、昆虫など世界各地の生き物たち。また、過去に生息していた恐竜や幻の生き物も含め、陸・海・空、過去、未来の生きとし生けるものに関する物語や図鑑などを集めます。

4. 《まいにち》

毎日の生活について子どもたちに考えてもらうための本棚です。暮らしの中で気になること、学校のこと、友達とのつきあい、家族との関係など日々の気になることに対してヒントをくれるような本を集めます。

5. 《食べる》

誰にとっても身近な「食べる」ことについてのテーマを設けます。実際に料理を作るためのレシピやマナーブック、食べものに関する絵本、食育本、さらには台所道具や市場の本などあらゆる角度から日々の「食べる」について考える本を揃えます。

6. 《大阪→日本→世界》

大阪を始発点とし世界を知ってもらうための本を集めます。旅の本を中心としながら、大阪の名物や名所、歴史についてわかる本、日本の文化、さらには世界の文化に興味を持ってもらえるような本を揃えました。

7. 《きれいなもの》

絵画や彫刻などのアートの分野はもちろん、詩やファッション、宝石、幾何学（数学）など多種多様なジャンルからこの世に存在する「きれい」を集めます。いろいろな角度から「きれい」の多様性を知ってもらうための本棚です。

8. 《ものがたりと言葉》

このテーマでは、ものがたりと言葉について考える本を集めています。ずっと読み継がれている大きな物語や古典、ファンタジー長編、詩歌や俳句など言葉の重みや繊細さを感じてもらえるような本を選びます。また、子どもにも読める辞典など道具としての言葉に対する意識を高める本も選びます。

9. 《未来はどうなる？》

これからやってくる社会がどうなるのかを想像するための本を集めます。のりもの本を出発地点としながら、テクノロジーや産業の未来、宇宙開発技術、さらにはSFなど、世界の行く末を見通すためのテーマです。一方、過去を振り返るための歴史を学ぶ本や戦争などに関する人類史もこの棚に入ります。

10. 《将来について考える》

一人一人の子どもたちが、どんな大人になっていきたいのか考えるための本を集めます。子どもと大人の違い、仕事やお金について、夢の叶えかた、そして希望に満ちたこれからの時間について考えるための本棚です。

11. 《生きること／死ぬこと》

子どもにとって、最も遠いものである「死」を意識することで、逆に生きていることの実感が湧いてくるのではないのでしょうか。生、死を扱った絵本や寓話や物語、詩などは多々あります。それらを前向きな一冊として包み隠さず子どもたちに届けます。

12. 《こどもの近くにいる人へ》

このテーマでは、子どもの近くにいる大人のための本を集めます。出産や子育て、教育に関する本など、親としての振る舞いや子どもとの距離感について考える本を選びます。多様になる家族の在り方もイメージしつつ、子どもの近くに生きる大人の悩みに寄り添った本を選びます。

オリジナルグッズ

文房具から加工食品、生活雑貨までさまざまなアイテムを展開します。子どもたちが好きなもの、大人たちにも良いなと思ってもらえるもの、親子で楽しめるもの、本との関係性を濃密にするもの、この場所に来た記念になるもの ... 様々な視点から発想し、すべてオリジナルで企画をしている「こども本の森 中之島」でだけご購入いただけるアイテムです。

アートディレクターの尾原史和がデザイン、マーチャンダイザーの山田遊が企画を行なっています。



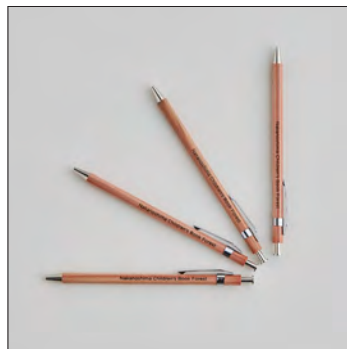
「青リンゴアメ」

1948年大阪創業のパイン株式会社。かの有名な輪切りのパイナップルの形をした飴を約70年製造しています。エントランスに設置された青りんごのオブジェにちなんで、青リンゴアメをつくりました。¥300



「測量野帳」

測量野帳は大阪に本社のあるコクヨの1959年来のロングセラー。こども本の森 中之島は物語の聖地であるとともに、建築の聖地にもなっていくでしょう。測量手帳はもともと建設現場などでメモ用に使われています。ブルー/グレー 各 ¥500



「木製ボールペン」

ほんのり香りも漂う、天然の木の素材で作られているボールペン。見た目も感触も優しいぬくもりがあります。本に囲まれているいると想像が広がって、心に留めておきたい言葉をメモに綴りましょう。¥450



「クーピーペンシル」

色鉛筆の描きやすさとクレヨンのような美しい発色を併せ持つ「クーピー」は、日本の子どもたちのお絵描き道具の定番アイテム。大阪の会社サクラクレパスが製造しています。オリジナルのパッケージで12色入りです。¥1,000



「てぬぐい」

「こども」「本」「森」のピクトグラムが一面に可愛らしく配置されたてぬぐい。地元、大阪のてぬぐい専門店「にじゆら」で製作しています。実用性に優れた木綿のてぬぐいは、海外などからここへ来館する方への日本のお土産にも。¥1,300



「ハンドタオル」

ガーゼとパイルの良さを合わせた肌触りの良い、吸水性抜群のタオル。お子様連れの親御さんに使用頻度が高いアイテムは何かとお聞きしたら、きっとタオルは上位にあるはず。大阪のメーカー「神藤タオル」で製作しています。¥900



「ストローボトル」

環境のことを考えると、飲み物はできるだけマイボトルで持ち歩きたいと思います。落ち着いた色合いで、程よいサイズ感なので大人も子供も使いやすいです。小さな子どもも飲みやすいストロー付き。¥3,500



「ピクニックラグ」

こども本の森 中之島の本は、建物外（公園内）に本を持ち出せます。芝生にこのラグを広げて寝そべりながらの読書はいかがでしょう。製造は大阪の「山陽製紙」。工業用に用いられるクレープ紙で作られていて環境に優しくとても丈夫です。¥2,000



「マグカップ」

本を外に持ち出して、ラグを敷いて本を読むならば、水筒にたっぷり用意したお茶を時々飲みながら、なんて素敵です。軽くて割れにくく、耐熱なので外での使用にもとても便利です。¥1,500



「mt マスキングテープ」

子供も大人もみんな大好きな「マステ」。ラッピング、デコレーションなどに重宝。バリエーションの分だけ楽しみも広がります。白地にグリーンの「こども」「本」「森」のピクトグラムが連続するこちらもぜひあなたのマステコレクションに。¥400

オリジナルグッズ



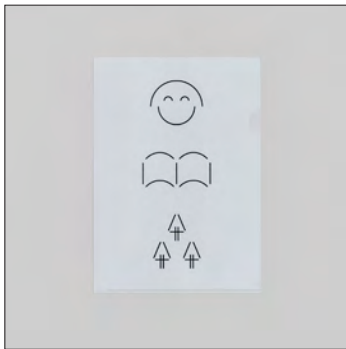
「絆創膏」

こどもはこれを貼るのが好き。お母さんは、こどもが転んだり引っ掻いたりしてケガをしたときのために、バッグの中に忍ばせていることが多いようです。元気印の勲章に。¥450



「ポストカード」

こども本の森 中之島に来て素敵な本との出会いがあったら、このカードにタイトルや感想を綴って友人や家族に送るというのも素敵な習慣になるかもしれません。4種 各¥150



「クリアファイル」

お土産にも実用アイテムとしても。本にまつわるメモやフライヤーなどはこのファイルに仕分けして入れておく、なんていう使い方もよいかもかもしれません。¥300



「トートバッグ」

本、ストローボトル、ラグを入れて長い紐を肩から斜めがけにして公園へ。お稽古の時に道具や本を持ち歩くのにもちょうど良いサイズです。¥3,000



「Tシャツ」

子どもから大人まで対応のサイズ展開が豊富なオリジナルTシャツ。ピクトグラムを配置したシンプルなデザインなので、老若男女問わず活躍の1枚です。

KIDS 110 / 130 各¥2,200
M / L 各¥2,700



「ステッカー」

こどもは大好きステッカー。べろっと剥がしくつつくとわかると、窓やテーブルなどあちこちに貼りたくなるものです。そんな子供心をくすぐってしまうオリジナルステッカー。¥400



「缶バッジ」

缶バッジとは、ちょこっと付け足すセンスを磨いてくれるアイテムかもしれません。バッグや帽子にここだ、というスペースを見つけて格好よくおさまると、とても嬉しいものです。ぜひご挑戦を。

3種 各¥250

※表示はすべて税抜価格

マーチャンダイジング：山田 遊（やまだ ゆう）

東京都出身。南青山のIDEE SHOPのバイヤーを経て、2007年、method（メソッド）を立ち上げ、フリーランスのバイヤーとして活動を始める。現在、株式会社メソッド代表取締役。21_21 DESIGN SIGHT SHOPなど、さまざまな店のディレクションを手がける。

「別冊 Discover Japan 暮らしの専門店」（エイ出版社 2013年）、「デザインとセンスで売れる ショップ成功のメソッド」（誠文堂新光社 2014年）。児童文学作家の神沢利子の孫にあたり、1983年に出版された「ゆうくとぼうし」のモデルでもある。

wearemethod.com

アートディレクション：尾原 史和（おはら ふみかず）

1975年高知生まれ。BOOTLEG代表。雑誌や書籍・図録やカタログなどのエディトリアルデザインを中心として、店舗や展覧会のアートディレクションなど、多岐にわたり活動をしている。マルチプル・レーベルとして写真集や画集の出版、靴などのプロダクトを製作。

著書に『逆行』（ミシマ社）、『デザインの手がかり』（誠文堂新光社）、E&Yより作品『Rule Book』を発表。bootleg.co.jp



1Fには、天井の丸い穴から光が差し込む、何もない円筒状のスペースがあります。ぼんやりと薄暗くて、ずっと心が落ち着くような場所です。何もないからこそ、想像はふくらみ、いろいろなアイデアが浮かんでくるかもしれません。また、ここでは時々映像作品が流れます。本の物語に出てくる言葉やシーンを、動く紙芝居のように映します。物語への興味や、物語に入り込んでいく楽しさを子どもたちに伝えられたらと思います。

『本のかげら』 Rhizomatiks Design

こども本の森の奥にたたずむのは、静寂につつまれた円筒の空間。そこに、こどもたちの本への興味の入口になるような映像作品を上映します。壁に映し出されるのは、いくつかの本から切り取られた物語の断片。縦にのびた壁を縦横無尽に動き回り、子どもたちを物語の世界へといざないます。本をひらけば、物語の世界が広がっていて、その世界の住人がいる。そんなことを、この作品から感じ取ってもらうことを期待します。

Rhizomatiks Design /ライゾマティクス デザイン

Webから空間におけるインタラクティブデザインまで、幅広いメディアをカバーする高い技術力と表現力を併せ持つチーム。デジタルテクノロジーを活かしたデザインによって、国内外のさまざまな商品開発、広告プロモーション、イベント表現を設計・実行・評価し未来にも適応するブランド設計・広告設計をサポートする。



大阪を南北に貫く御堂筋と交わり、大阪の歴史・文化の中心として生き続けてきた中之島。

「こども本の森 中之島」は、その中之島に新たに誕生した、子どもが本と出会い、本を楽しみ、本に学ぶ施設です。

設計にあたっては、そのすぐれた場所の個性を十二分に活かすこと、そして、子どもが主役の施設であることを第一に考えました。

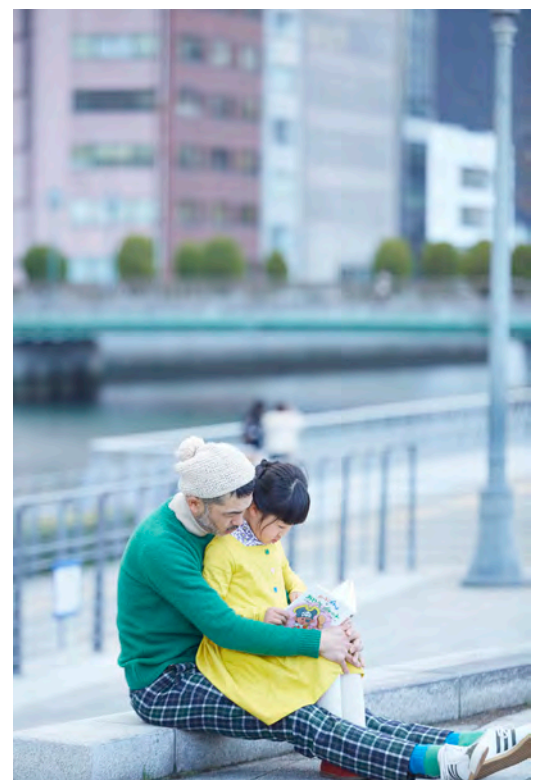
建物外観は、堂島川に沿って弓なりに伸びる形で、東端は、エントランス・ポーチと連続する水際のテラスになっています。ポーチを覆うゲートが、南北の風景をつなぎます。建物内部は、全面本棚の壁で囲われた三層吹き抜けの空間で、その中を階段、ブリッジ通路が立体迷路のように巡ります。その「迷路」を進んでいくと、本の壁のすき間から堂島川の風景が目飛び込んできたり、吹き抜けを見下ろす飛び込み台のような謎のスペースが現れたり、井戸の底のような空間に行き当たったりします。その全てが、子どものための閲覧室です。気になる本が見つかったら、階段でもどこでも好きな場所で読み始めて構いません。天気が良ければ、外に出て、水際テラスで本を開くのもいいでしょう。建物を中心とする中之島広場一帯が、子どもが自由に読書を楽しめる「本の森」なのです。

子どもたちをエントランス・ポーチで出迎えるのは、「永遠の青春」と名付けられた謎の青リンゴのオブジェです。

「なぜ青リンゴがここにあるのか」

「永遠の青春とはなんなのか」

謎の答えは、訪れた皆さんで自由に考えてください。



【こども本の森 中之島 施設概要】

所在地：大阪市北区中之島1丁目1-28（中之島公園内）

開館日：新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の拡大防止のため、2020年3月1日（日曜日）14時を予定していた開館を当面、延期いたします。

開館日については決定次第、発表いたします。

開館時間：午前9時30分から午後5時まで

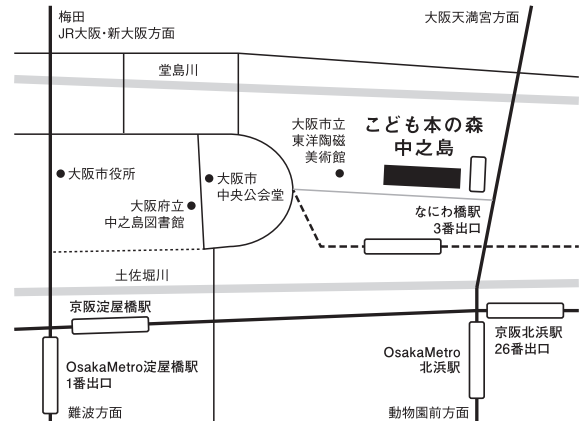
休館日：月曜日（月曜日が祝日の場合は開館し、翌平日は休館）、他・年末年始、蔵書整理期間など

入場料：無料

構造：鉄筋コンクリート造 3階建

延床面積：約800平方メートル

設計：安藤忠雄建築研究所



こども本の森 中之島は、JV（共同企業体）である TRC & 長谷工 meet BACH が運営をしています

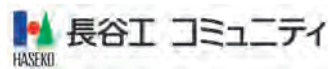
株式会社図書館流通センター（TRC）

TRCは1979年の創業以来、TRC MARC（本の書誌データ）の製作、本の装備、選書・発注システム（TOOLi）の開発、図書館の運営、PFI事業への参画など、図書館のその時々ニーズに応じて、ノウハウを蓄積してきました。図書館は、本を貸し出すだけの施設から、市民の課題を解決したり、市民の居場所へと変化しています。コンテンツを収集、保存し、市民へ提供する役割は変わりませんが、それに加えて地域のにぎわい創出に寄与し、まちづくりの役割も担っています。そのような変化の中で、それぞれの地域ならではの、オリジナリティのある空間やサービスをご提供できるよう、私たちの役割も変化していることを実感しています。
www.trc.co.jp



株式会社長谷工コミュニティ

『都市と人間の最適な生活環境を創造し社会に貢献する』という長谷工グループ企業理念のもと、私たちは、建物管理を行う上で「安心」「安全」「快適」という3つの観点で建物を利用されるみなさまを守ることに加え、豊かなコミュニティづくりを積極的に進め、より楽しく心地良い環境を提供していきたいと考えています。ゼネコン系建物管理会社ならではの高い技術力と豊富な経験を最大限に活かしながら、こども本の森 中之島を安心・安全・快適な施設とするべく建物管理はもちろん建物修繕や修繕計画等様々な提案を行ってまいります。
www.haseko-hcm.co.jp



有限会社 BACH（バツハ）

ブックディレクターの幅允孝を代表とする選書チーム。人と本の距離を縮めるため、公共図書館や病院、動物園、学校、ホテル、オフィスなど様々な場所でインタビューワークをベースにした選書やその差し出し方に留意したライブラリーの制作をしています。最近の仕事として「札幌市図書・情報館」の立ち上げや、ロンドン、サンパウロ、ロサンゼルス「JAPAN HOUSE」ライブラリーなど。近年は本をリソースにした企画・編集の仕事も多く手掛けています。
www.bach-inc.com



PRESS CONTACT ご質問、取材や掲載等に関するご希望は下記までご連絡ください。

竹形尚子（デイリースプレッス）

東京都目黒区青葉台3-5-33 川辺ハイツ1F

tel. 03-6416-3201 / 090-1531-6268 naotakegata@dailypress.org

写真：伊東俊介（表紙以外）